

---

# 南方熊楠の思想

---

—「南方マンダラ」から「南方哲学」へ—

---

日野裕一郎

## はじめに

現代社会を生きる我々にとって、〈環境破壊〉や〈環境保護〉といった言葉やそれに関わる行為は、目を背けることのできない現実として存在している。そしてこれらのことにどのように対処すればよいかということをお急ぎに考えなければならない事態にまで立ち至っている。そこで我々がしなければならないことは何かを考えた時に、実際に〈環境保護〉への行動を起こすことはもちろんであるが、これまでに〈環境保護〉に関わってきた人物がどのような〈環境保護〉を展開してきたのかを調べ、それらの中からヒントを得ることも大切であろう。

本稿で取り上げる南方熊楠（1867～1941）は、日本においてエコロジーについて紹介した最初の人物であり、エコロジーを一つの理由として明治政府が押し進めた神社合祀に対して反対運動を行った人物である。これまでの研究では南方熊楠は、破天荒な人柄ながらも自然を愛し、自らの人生を投げ打ってまで自然保護を訴えた人物であるという側面がよく知られている。確かにそれは事実だが、その側面ばかりがクローズアップされてしまい、彼がどのような思想に基づいて自然保護運動（神社合祀問題が大きなものである）を展開したのか、その根底にあるものが何だったのかということが十分理解されているとは言いがたい。事実、彼が展開した運動を理解することは、環境破壊の著しい現代社会において大きな意味を持つものであろうし、現代社会のみではなく、明治時代ですら過度な産業文明に対して警鐘を鳴らす人物がいたということは現代の我々にとって非常に大きなインパクトを与えるのであろう。しかし、果たしてそれらの事実を知る、又は知らしめるだけで人々の関心は環境保護に対する意識へと結びつくのだろうか。私はそうは思わない。もしかすると「南方熊楠という人物がいた。その人物は明治時代に自然保護をした」という単なる歴史的事項になってしまうだけかも知れない。もちろん、彼が行った自然保護運動は事実なのだが、それだけではなく、彼が行った自然保護や研究から大きなメッセージが汲み取れるのではないのか。そしてそれは現代の私たちにとって、今までの環境保護のセオリーや原動力よりも遥かに巨大なものではないか。これらについて彼が宗教や科学に関する考えを率直に述べている土宜法竜宛書簡の中から読み取れるのではないかと考えたことが、本稿を執筆するにあたっての問題意識であった。

では一体何を明らかにしなければならないのか。それは、南方熊楠が何を根拠に自然保護を行っていたのか、どのような思想を基に彼自身の研究を行っていたのかということをお明らかにすることだろう。この二点を解明することで、先に述べた環境破壊に関係する私たちに必要なものは何

なのか、これからの環境保護等に対してどのように取り組めばよいのかということをも明らかにできるのではないかと私は考えている。言うなれば、＜環境保護の意識を生み出すための意識＝環境保護メタ意識＞に必要なものは何かを明らかにすることが、現代社会において重要な意味を持つのであり、これを明らかにすることは、環境保護をしなければならない人々(すなわち私たち)にとって新しいモチベーションになると考えられる。

これらの問題について考えることが、本稿の課題であるが、その中でも熊楠が論じた、自然、社会に対する人間の在り方や接し方等を取り上げて考察を進めたい。本稿で明らかにする、南方熊楠の思想が私たちにとって新しい思考と行動の原動力となることを願っている。

これまでの研究者たちが捉える熊楠像は、民俗学者、エコロジスト、思想家の三つの側面を有しているが、本稿では特に思想家としての側面に注目する。その中で熊楠と当時有数の学僧である土宜法竜との交流に焦点をあてることによって宗教と社会に関する熊楠の考え方を分析し、さらに「南方マンダラ」を考察する。

## 1. 宗教と社会をめぐる

南方熊楠が最初に大きな影響を受けたのは、幼少時から読み始めた『和漢三才図会』<sup>1</sup>、『本草綱目』<sup>2</sup>、『諸国名所図会』<sup>3</sup>、『大和本草』<sup>4</sup>等の和書及び漢籍による膨大な知識が挙げられる。留学時代には、それまでの莫大な知識に加え、当時の学術最先端の地であるロンドンで接した、より専門性を備えた学問や論述方法が熊楠にとって大きな衝撃だったと考えられる。さらに、留学時代に、既存の知識をカテゴリー化することだけではなく、それらを再構成して考える方法も得ることができたと言えよう。帰国後に熊楠は以下の述懐を残している。

「小生二年来この山間におり、記憶のほか書籍としては『華嚴経』、『源氏物語』、『方丈記』、英文・仏文・伊文の小説ごときもの、随筆ごときもの数冊のほか、思想に関するものとはなく、ほかは植物学の書のみなり。それゆえ博識がかったことは大いに止むと同時にいろいろの考察が増して来る。いわば糟粕なめ、足のはえた類典ごときことは大いに減じて、一事一物に自分の了見がついて来る。」<sup>5</sup>

こうして、＜莫大な知識量＞と、＜カテゴリー化し、再構成する中での新たな発見＞の二点は、

<sup>1</sup> 寺島良安著。105巻。正徳2年(1712)成立。中国の『三才図会』(王圻撰。明代。106巻。1607年)にならって、和漢の万物の図を掲げ、漢文で解説を付したもの。

<sup>2</sup> 李時珍著。52巻付図2巻。1596年頃刊。1890種余りの薬物を従来の三品分類を排した本草書。動植物といった分類に従い16部60類に配列して解説。

<sup>3</sup> 各土地の名称の由来や名所案内を記したもの。名所図会としては安永9年(1780)の「都名所図会」が最も古い。ここで熊楠が挙げている『諸国名所図会』は『五畿内地理志』の別名である『諸国名所図会抜書』のことかと思われる。

<sup>4</sup> 貝原益軒著。本草書。16巻、付録2巻、諸品図3巻。宝永5年(1708)成立。『本草綱目』所載のものに、日本特有のものや外国産のものも加え、総数1362種を分類し和文体で記述する。

<sup>5</sup> 『南方熊楠 土宜法竜 往復書簡』、飯倉照平、長谷川興蔵編集、1990、八坂書房、274頁。

帰国後に「いろいろの考察が増して来る」ことで「一事一物に自分の了見がついて来る」という思考や、粘菌とく生と死>に関する研究において粘菌学と『涅槃経』の所説を関連づけてそれらの共通点を見出す<sup>6</sup>という熊楠の思考の中で生きることとなった。

このような熊楠の思考システムが現実となって表れたものが、神社合祀反対意見と土宜法竜との間に交わされた宗教をめぐる議論だと言える。熊楠は神社合祀反対意見の中で、以下の8つの理由から反対の立場を主張している。<sup>7</sup>

1. 「神社合祀で敬神思想を高めたりとは、地方官公吏の報告書に誑かざるのはなほだしきものなり。」 2. 「神社合祀は民の和融を妨ぐ。」 3. 「合祀は地方を衰弱せしむ。」 4. 「神社合祀は国民の慰安を奪い、人情を薄うし、風俗を害することおびただし。」 5. 「神社合祀は愛国心を損ずることおびただし。」 6. 「神社合祀は土地の治安と利益に大害あり。」 7. 「神社合祀は史蹟と古伝を滅却す。」 8. 「合祀は天然風景と天然記念物を亡滅す。」

以上が、熊楠が神社合祀反対意見の中で展開した主張だが、大きくまとめると2つの側面が見えてくる。1つは「民の和融」というキーワードを主軸に据えた意見（特に1、2、3、5、6、7）であり、もう1つはエコロジーをキーワードに据えた意見（特に4、8）である。

もちろんこれらは無関係なものではない。「民の和融」を維持するには自然、つまりエコロジーが必要であり、エコロジーを維持するためには「民の和融」なくしては維持できない。それらが共存した世界こそあるべき姿なのだ。そのために彼は神社合祀令という名の下に明治政府が押し進めようとしている神社の破壊行為、神社周囲の森の伐採に強く反対した。エコロジーと社会が融合した世界を、熊楠は理想の社会像として描いていたのである。

さらに、宗教的な側面を見てみると、熊楠が宗教論議を多く交わした土宜法竜との書簡に、熊楠が考えるく社会と宗教の関わり>が特徴的に記されている。その中で最初に論議していることは法竜が発した「社会の暗黒」<sup>8</sup>に関する問題だ。当初法竜は「社会の暗黒」を解決したいという意見を込めて熊楠へ宛てたのだろうが、熊楠は以下のように返している。

「仁者ら、ただ唐朝の故経、晋訳の古書をよみ、その時代に大実用ありし諸尊を敬礼するのみ、今の世に大実用あるべき科学（真言の世間物質開化上の応用）を排除す。」<sup>9</sup>

<sup>6</sup> 『涅槃経』に、この陰滅する時かの陰続いて生ず、灯生じて暗滅し、灯滅して闇生ずるがごとし、とあり、そのごとく有罪の人が死に瀕しおると地獄には地獄の衆生が一人生まると期待する。その人また氣力をとり戻すと、地獄の方では今生まれかかった地獄の子が難産で流死しそうだとわめく。いよいよその人死して眷属の人々が哭き出すと、地獄ではまず無事で生まれたといきまく。（中略）故に、人が見て原形体といい、無形のつまらぬ痰核の半流動体と蔑視さるるその原形体が活物で、後日蕃殖の胞子を護るだけの粘菌は実は死物なり。（中略）人が鏡下にながめて、それ原形体が胞子を生じた、それ胞壁を生じた、茎を生じたと悦ぶは、実は活動する原形体が死んで胞子や胞壁に固まり化するので、一旦、胞子、胞壁に固まらんとしかけた原形体が、またお流れとなって原形体に戻るは、粘菌が死んだと見えて実は原形体となって活動を始めたのだ。今もニューギニア等の土蕃は死を哀れむべきこととせず、人間が卑下の現世を脱して微妙高尚の未来世に生ずるの一段階に過ぎずとするも、むやみに笑うべきではない。（『南方熊楠 岩田準一 往復書簡 男色談義』、月川和雄編集、1991、書房、57～59頁参照。）

<sup>7</sup> 南方熊楠『南方熊楠全集』第7巻、1971、平凡社、476～594頁参照。

<sup>8</sup> 『南方熊楠 土宜法竜 往復書簡』、同上、315頁。尚、ここでいう「社会の暗黒」を示した法竜から熊楠へ宛てた書簡は未発見なので、「社会の暗黒」が何かを特定することはできないが、おそらく社会に蔓延する犯罪等の暗黒面のことを指していると考えられる。

このように、真言の教えを「今の世に大実用あるべき科学」と位置づけながらも、僧がそれを活用しないことを批判している。そして「今の世に大実用あるべき科学」をどのように活用すればよいかを熊楠は以下のように述べている。

「科学とは他の宗教は知らず、真言曼陀羅のほんの一部、すなわちこの微々たる人間界にあらわるるもの、さてあらわるるものうち、さし当たり目前役に立つべきものの番付を整え、一目了然で早く役に立つようにする献立帳を作る法に過ぎず。原子といい進化といい、ほんの曼陀羅の見様の相場付の定度なり。故に真言の本義深奥処に比ぶれば、衣裳をなす糸条と外面人目に反射して現出する紋ほど違うなり。物界に限らず、心界、事理界のこと、みな科学をはなれて研究も斉列もできず。いいようを換うれば、大日不可思議本体中、科学はわずかに物界、心界、事理界等の人間によく分るほどの外に一步を出だす能わず。」<sup>10</sup>

「世界の暗黒」を救うために、「科学教育」が必要<sup>11</sup>であり、真言曼陀羅はそれを包摂しているということだ。その真言曼陀羅を社会に対してどのように敷衍するべきかを、科学者と僧との役割分担に触れながら以下のように述べている。

「僧徒だけでも、主として物質の科学は世にいわゆる科学者にまかせ、何とか順序立て、方法を整えて、この心性の未解のことを科学的に攻撃して、分かるだけ少しずつなりとも分かって順序ある項目とせんことを望むなり。」<sup>12</sup>

「社会の暗黒」を救いたいと願う法竜に対して、現在の仏教の有様では時代遅れで不可能だときっぱりと提示しており、「社会の暗黒」を救うには「科学教育」を重視するべきであり、真言曼陀羅はその科学を包摂していることに注目し、現代社会に合わせて僧も変化すべきだ、との提案を述べている。

神社祭祀反対意見では、「民の和融」というキーワードを主軸に据えて論を展開してた。これまでの研究ではエコロジーの立場に立って意見を発表したという見解がなされているが、「民の和融」や反対意見の第8項目で挙げている「天然風景」の両者が大切であり、それらは「わが国の曼陀羅」<sup>13</sup>として存在することが、意義があることだと考えている。

法竜と交わされた書簡では、仏教、特に真言宗を中心とした論を展開している。僧の墮落を嘆きながらも、それらが社会に合わせて変化することで社会の問題点を解決することができるのではないかと述べている。〈軍事力〉、〈殖産興業〉、中でも〈科学教育〉が必要だということを

<sup>9</sup> 同上、316頁。

<sup>10</sup> 同上、320～321頁。

<sup>11</sup> 「なるべく産を興し利に通じて一社会を繁盛隆盛ならしむるにあらざれば、全社会たちまち他の奴隷となり、母も異国の婢にされ、姉も弟の目前に姦せられること、一昨年支那の乱にて知るべし。兵備も必要なり。殖産も必要なり。ことに科学教育が必要なることは、近来欧州、米国の例を見られよ。」(同上、359頁。)

<sup>12</sup> 同上、371頁。

<sup>13</sup> 『南方熊楠全集』第7巻、同上、559頁。

訴えている。〈科学教育〉に関しては、直後の文に「今わが真言の教えは万有を網羅して残すことなし。故に科学というもその一相なり。」<sup>14</sup>と述べている。この言葉は科学と宗教（真言）は対立的に存在するのではなく、科学は完全に宗教の中の一部だということを表している。このような熊楠の考えを、〈科学を包摂する真言の教え〉とまとめておきたい。熊楠は〈科学を包摂する真言の教え〉に注目し、僧がこれから実行すべきことを指摘している。これは、〈個人救済〉と共に宗教の目的である〈社会矯正〉に関して僧が社会の中で活動すべきことを指摘していると言えよう。これにより、〈仏門—俗世〉、つまり〈宗教—社会〉の確実な関係性が築かれ、「社会の暗黒」は解決し得るとするのである。

## 2. 「南方マンダラ」をめぐる

では熊楠はどのような思想基盤から以上のような意見を発したのだろうか。その思想基盤となったのは、彼の認識論及び世界観を図示した「南方マンダラ」だ。

図1<sup>15</sup>では直線がランダムに引いてあり、それをランダムな曲線が取り囲んでいる。さらにその上にそれぞれ「ル」と「ヌ」という線が二本引かれている。この図は何を表しているのかというと、「萃点」とはどのようなものかということを図示しているものだ。

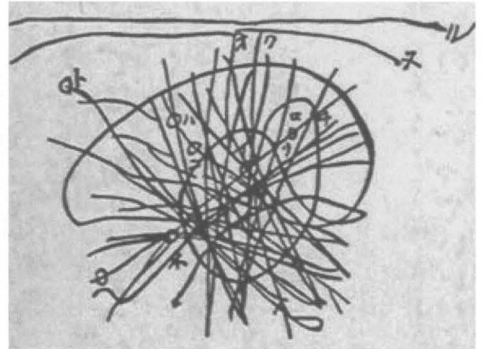


図1

図中では様々な直線がランダムに引かれている。このランダムに引かれた線は物事が様々な方向へと変化していくことを意味している。例えて言うならば人間がある場所へ向かって歩いている状態や、物が落下している状態、つまり物体が時間的、空間的に一定せず、変化し続ける状態を意味している。この線がランダムに引かれている中でも、線が交わる場所が何点も見られるが、熊楠はそれに丸をつけてそれぞれ「イ」、「ロ」、「ハ」、「ニ」、「ホ」、「ヘ」、「ト」、「チ」、「リ」と字を充てている。その中でも特に多くの線が交わっている所が「イ」（図中央部の丸で囲まれた部分）だが、ここに注目していただきたい。この「イ」という点は上に述べた、物事が一定しない状態、変化し続ける状態の中でそれらが一点に集中する所、つまり物事が多く交わる場所を表している。その中心部から周囲を見てみると、それぞれの直線（変化する物事）がどの方向から伸びており、どこへ向かっているのか、そして「イ」で出会ったそれぞれの関係がどのようなものなのかということが分かりやすくなるということで、熊楠は「イ」の様に物事が集中し、それらの関係性を紐解く上で一番理解しやすい点を「萃点」と名付けた。簡単に例えると、人物Aが道を歩いている途中に建物の上から瓦礫が落ちてきて怪我をした場面を図中の「イ」と仮定すると、怪我をした人は何故そこを歩かなければいけなかったのか、瓦礫は何故落ちてきたのか、

<sup>14</sup> 『南方熊楠 土宜法竜 往復書簡』、同上、359頁

<sup>15</sup> 同上、308頁。

落下した距離はどのくらいかということをそれぞれ紐解く事ができるということだろう。

そしてその「萃点」から遠ざかるにつれて人智では到底及ばない不思議、大日如来本体があり、それは私たちの宇宙を包摂していると述べている。

「さてすべて画にあらわれし外に何があるか、それこそ、大日、本体の大不思議なり。」<sup>16</sup>

図で言うと、大日如来の本体は「ヌ」、「ル」よりももっと外側に広がっているということだ。この図が一般的に「南方マンダラ」だと理解されているが、もう一つ注目したい図がある。それは熊楠自身が「予の曼陀羅」<sup>17</sup>と唱えた図だ。中沢新一はその図を「南方マンダラ」として捉えている。(図2<sup>18</sup>)

これは鶴見和子が言う「南方マンダラ」と違い、様々な字が書かれている。これらの字を細かく見ると、「大日」、「心」、「物」、「名」、「印」、「力」、「因」、「果」、「縁」、「起」という全部で10個の字を読み取る事ができる。中沢新一の言う「南方マンダラ」は、この10個の要素がこの世を成り立たせていることを図示したものであり<sup>19</sup>、鶴見和子の言う「南方マンダラ」とは違う構造をしていることがわかる。

この図に関する熊楠の説明の冒頭に「曼陀羅ほど複雑なものなきを簡単にはいいがたし。いいがたいが、大要として次に述べん。」<sup>20</sup>という言葉に注目すると、熊楠が真言密教を基に自らの世界観、「予の曼陀羅」を展開していたのではないかと考えられる。

さらに熊楠は、「四曼陀羅のうち、胎藏界大日中に金剛大日あり。その一部分が大日滅心(金剛大日中、心を去りし部分)の作用により物を生ず。」<sup>21</sup>と述べ、「物」がどこから生まれて来るかを出発点に論を展開している。金剛界曼陀羅は「金剛界すなわち大日如来の金剛のような堅固不壊の智の成分(界)から成る」<sup>22</sup>曼陀羅であり、この世の物事の関係性、運動法則のすべてが収まっているという教を説いた曼陀羅だが、熊楠はこの金剛界曼陀羅全体を大日如来本体として捉えるところから出発している。それは純粋な観智体であり、宇宙全体を包摂しているということだと読み取れる。熊楠はこれを大日如来の「心」という言葉を使って表現しているが、ここで使われている「心」はわれわれの心と同じ意味ではなく、観智体としての大日如来そのものを表している。さて、この観智体には自分自身を外に展開していく力が備わっており、その力が大日如来本体、大日如来の心の制御を離れて宇宙空間に広がる時、初めて物界、すなわち時空が生

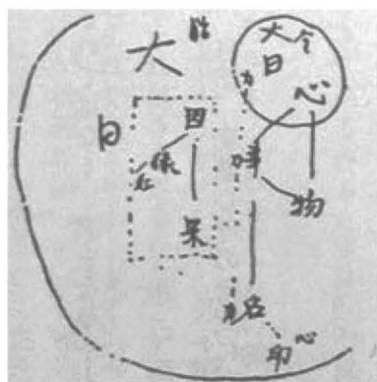


図2

<sup>16</sup> 同上、309頁。

<sup>17</sup> 同上、333頁。

<sup>18</sup> 同上。

<sup>19</sup> 中沢新一『森のパロック』、1992、せりか書房、91頁の図、及び解説を参照。

<sup>20</sup> 『南方熊楠土宜法竜往復書簡』、同上、333～334頁。

<sup>21</sup> 同上。

<sup>22</sup> 村上真完『仏教の考え方』、1998、国書刊行会、202頁。

成され、その反動で心界、われわれの意識のようなものが生成されるということを述べている。そしてこの物界と心界が交わることによって初めて「事」という事象が生まれるということを説明している。「事」については熊楠の描いた図3を用いて説明する。

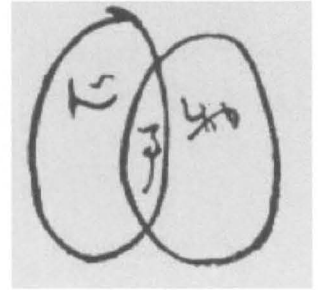


図3

図3には二つの円が重なっており、それぞれの円に「心」、「物」、そして円が重なっている部分に「事」という字が見られる。この「心物事」に関する熊楠の構想は「萃点」の構想よりも古く、熊楠がロンドン時代にパリにいる土宜法竜に宛てて書いた、明治26

年12月21日付の書簡中に彼自身の言葉で「小生の事の学」として述べられており、「南方マンダラ」が形成される初期段階ではないかと考えられる。その「事の学」とはどのようなことかという、世の中には「心」と「物」があるという前提から出発しており、「心」とは私たちの欲望や心理を表し、「物」は単純に物質を表している。これらが交わることによって初めて「事」、つまり事象や人工物が発生するという考え方だ。世界を構成するものとして、精神と物質というデカルト以来の二元的理解を批判し、「事」の重要性を指摘したところに熊楠特有の主張がある。

ところで、「心」、「事」、「物」は、それぞれ人文学、社会科学、自然科学に相当しているのではないと思わせる。「心」の部分を見つめる人文学は、研究対象が人間であり、「物」に相当する自然科学の研究対象は物質だとすると、人間が物質を扱い、文化や文明を築く「事」は文化、文明を研究対象とする社会科学に相当すると考えられる。現代社会でいうこれらの学問を、熊楠は「心」、「事」、「物」という言葉で表していたのではないだろうか。

これらの「心物事」に関する熊楠の構想は中沢新一の言う「南方マンダラ」の中において、大日から「心」と「物」が発生し、それらが交わる事によって「事」が生成されるということへ活かされている。

中沢新一の言う「南方マンダラ」の中に、「名」と「印」という文字が見える。「名」と「印」についての熊楠自身は前述のように述べている。

「真言の名と印は物の名にあらずして、事が絶えながら（事は物と心とに異なり、止めば断ゆるものなり）、胎藏大日中に名として残るなり。これを心に映して生ずるが印なり。故に今日の西洋の科学哲学等にて何とも解釈しようなき宗旨、言語、習慣、遺伝、伝説は、真言でこれを実在と証する。すなわち名なり。」<sup>23</sup>

ここで述べられている熊楠の言葉を読み解いてみよう。「名」とは何かというと、私たちが日常的に使う名前という意味ではない。名とは、私たちがある一定のものに対して持っている概念を指す。その「名」というものに対して私たちが思い浮かべることが「印」であるということを説明している。この二者の具体的な違いは、「名」はあくまで心の奥底にある抽象的なもの、「印」は具体的なイメージという違いではないだろうか。この「名」と「印」の例に関して、中沢新一

<sup>23</sup> 『南方熊楠土宜法竜往復書簡』、同上、333頁。

は音楽を例に説明している。

「人間は音楽を聞いて、じっさいにはそこにはない抽象的な構造を理解して、音の流れを音楽として楽しんでいる。音楽にも「名」のレベルがあるのだ。しかし、その構造を時間の流れの中で展開して、じっさいの曲として作曲し、演奏する、具体的な音楽がなければ、人間はそのような「名」の存在を感じ取ることもできない。だから音楽でも「名のレベル」と「印」のレベルが共在しあっているわけだ。」<sup>24</sup>

音楽は、物質としてそこにはないものの、「名」から私たちがイメージするもので、「名」とは決定的に異なるものだろう。音楽の他にも、形として見えないもの、一定の形に捉えられないものを意識下で捉える、例えるならば時間の流れや空間の移動等の経験が挙げられるのではないだろうか。こういった無形を意識下で有形に変成する経験を積み重ねることにより、「名」は言語や習慣のようなく無意識の深層心理>として残り、さまざまな人々に「印」を生み出すこととなる。そして、それが次の「事」を引き起こし、途切れずに継続していくことでこの世界が成り立っていることを示しているのではないだろうか。これらの一連の流れを熊楠は次のように説明している。

「力の応作が心物、心事、物名、心物心、心名もの、……心名物事、事物、心名、……事物心名事、物心事、事物……心名物事事事心名、心名名物事事物心というあんばいに、いろいろの順序で心物名事の四つを組織するなり。」<sup>25</sup>

これらを踏まえて中沢の言う「南方マンダラ」を再度見てみると、大日から「物」と「心」が生まれ、それらが交わることによって「事」が生成する。そして「名」が「印」に変わる時に我々の心の作用、すなわち「心界」がかかわってくるということを図示していると理解できる。以上の説明は熊楠が描いたマンダラの右の部分だが、左の部分に「因果、縁起」という項目がある。

ここで挙げられている因果、縁起を使って熊楠が表現したかったものは、それらの違いを明確にし、「大日」、「心」、「物」、「事」、「名」、「印」の一連の変成の中でどのように作用するかということだと考えられる。この「縁起」、「因果」についても熊楠による図解があるので、ここに掲げたい。(図4)

この図について、熊楠は以下のように述べている。

「因がそれがなくては果がおこらず。また因異なればそれに伴って果も異なるもの、縁は一因果の継続中に他因果の継続が竄入し来たるもの、それが多少の影響を加うときは起(甲図。熊楠、那智山にのほり小学教員にあう。別に何のこともなきときは縁。)乙図。その人と話して古え撃剣の師匠たりし人の聳ときき、明日尋ぬるときは右の縁が起。)故にわれわ

<sup>24</sup> 『森のバロック』、同上、90頁。

<sup>25</sup> 『南方熊楠土宜法竜往復書簡』、同上、333頁。



れは諸多の因果をこの身に継続しおる。縁に至りては一瞬に無数にあう。それが心のとめよう、体にふれようで事をおこし(起)、それより今まで続けて来たれる因果の行動が、軌道はずれゆき、またはずれた物が、軌道に復しゆくなり。」<sup>26</sup>

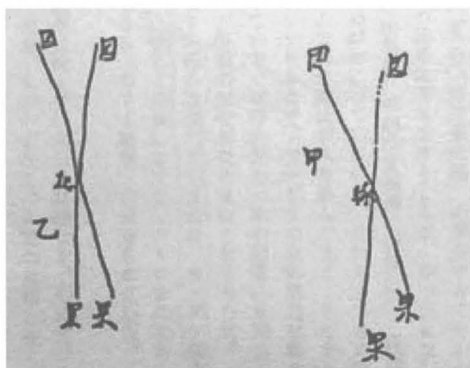


図4

物事がある方向に向かって進むとき、他の物事と交わることによって方向が変わる事象を「起」、方向が変わらなければ「縁」ということを説明している。そしてそれらの「縁」と「起」は「大日」、「心」、「物」、「事」、「名」、「印」に「力」として加わり、それらはすべて大日如来の叡智体の中に包摂されているということを図示しているのが中沢新一の言う「南方マンダラ」だと考えられる。

## おわりに

以上の「南方マンダラ」を巡る考察において、浮き彫りになってきた南方熊楠の思想上の基盤は仏教、特に彼が多く言及する真言密教に多大な影響を受けていると言ってよい。＜科学を包摂する真言の教え＞を基に示した物事の関係性についての彼の思想、「南方マンダラ」の中には大日如来をはじめ、それまでは科学的とは異質のものとして認識されてきた仏教を彼独自の科学的概念に当てはめており、仏教理論を基盤にした科学概念を築き上げているという点が彼の思想の特色と見られる。その熊楠の思想を象徴する一文をここに挙げる。

「今わが真言の教えは万有を網羅して残すことなし。故に科学というもその一相なり。」<sup>27</sup>

帰国後はそれまでの熊楠の研究には見られなかった心理学などに興味を示し、その研究を進める過程で「予の曼陀羅」を編み出し、仏教の重要性を指摘したことや、神社合祀反対意見において「民の和融」を大きく取り上げ、「民の和融」を実現するには曼陀羅が非常に重要な要素になることを指摘した。

神社合祀反対意見の中では「民の和融」を人間社会と自然環境との関わりの中で理解しているが、土宜法竜との書簡では宗教と社会との関わりについて触れている。その中では、より良い社会を実現するためには＜軍事力＞、＜殖産興業＞、中でも＜科学教育＞が必要だということを訴えており、それを包摂する真言曼陀羅が重要な役割を担うことを指摘している。その熊楠の思想を図示したものが「南方マンダラ」に他ならない。

「南方マンダラ」は熊楠が考える、我々が住む世界を形而上的に説明する哲学ではないかと私

<sup>26</sup> 同上、334頁。

<sup>27</sup> 同上、359頁。

は考えている。言うなれば、熊楠が考えたこのような形而上学が、一つの哲学としての様式を備えたシステマティックなものだとすれば、それは〈南方哲学〉として新たな分野を開拓することができるのではないか。

これらの熊楠の思想は、機械論的な近代科学に対して警鐘をならすものだと考えられる。仏教理論に基づいた独自の思想と、その中に西洋科学を包摂する熊楠独自の思想スタイルは、「南方マンダラ」を基にした「南方哲学」とも言える構造であり、21世紀において新たな理論的展開を示す可能性を秘めているのではないかと私は考えている。

付記：本稿の執筆に際して、佐久間正教授よりいくつかの教示を得ました。記して感謝致します。